

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行

第3回業務推進全体会合

逐語録

(木村 浩) 時間になりましたので、第3回業務推進全体会合を始めたいと思います。

まずは配布資料の確認をしたいと思います。議事次第が3-0です。次に、前回の議事録案です。3-1でお願いします。次に、今日の午前中にPOの中間フォローがあったのですけれども、そのときの資料をそのまま配布しています。こちらは3-2でお願いします。次に、「社会調査に関する検討」という資料です。こちらが3-3です。それから、2つのアンケートがあると思います。「第6回エネルギーと原子力に関するアンケート」が、昨年度の首都圏住民用のアンケートです。こちらが3-4-1です。「第7回エネルギーと原子力に関するアンケート」が、原子力学会員用のアンケートです。3-4-2でお願いします。本日の資料は以上ですが、過不足ございませんか？ よろしいですか。

0. 議事録確認

(木村 浩) それでは、早速議事に入りたいと思います。

最初は議事録確認です。前回は、9月18日、シンポジウムの直後に行なっています。こちらの議事録案に関しては、すでにメールで送っていますので、ご確認いただいているかと思います。特に確認しなければいけないことはございませんので、何かお気づきの点がありましたら、終わりまでにご指摘いただければと思います。

1. 進捗報告

(木村 浩) 次の議事は進捗報告です。まずは、その後何をやったかという事務的なお話から入っていきます。

10月31日に外部評価委員会がありました。私と土田先生と神崎さんで説明を行なったということになります。

本プロジェクトは、5名の外部評価委員に評価をしていただいています。外部評価委員は、関西大学の安部先生、元原子力委員の松田さん、東大の定松先生、コンサルタント会社OBの新澤さん、学習院大学の森田先生です。森田先生はご欠席でしたが、議事録が整ったら、配布資料と議事録をお送りして、コメントをいただくというプロセスで代えさせていただこうと考えています。

外部評価委員会では、シンポジウムまでに取り組んだことをご説明しました。全体としては、順調に進んでいる、今後も頑張ってくださいという評価をいただいています。昨年度は社会調査が終わったタイミングでの外部評価だったので、社会調査の議論になりましたけれども、今回はフォーラムの議論が中心になりました。昨年度の終わりに何となく見えてきたものがちゃんと形になっているようで、よかったという言葉をいただいています。

—— フォーラムを見学された松田さんから何かありましたか？

(土田) ほめていただきました。特に改善の指摘はありませんでした。

—— フォーラムに関しては特にコメントはありませんでした。

シンポジウムに行けなくて申し訳ありません、でも記録は読みました、面白かったです、というご発言はありましたけれども。

(木村 浩) 定松先生もフォーラムに来ていただきましたが、特にコメントはありませんでした。

(土田) なかったですね。

(木村 浩) まあ、いろいろ細かいディスカッションはしましたけれども。2時間の枠組みの中で、少し時間が足りなかったところがありますが、全体として順調に進捗しているということはよく分かりました、ということでした。

それでは引き続き、本日の午前中に行なわれた PO の中間フォローについてお話しします。資料 3-2 に基づいてお話をしたということになります。前回お話しした内容と重なる部分も多いのですが、軽く確認しておきたいと思います。

(スライド 4) スライド 4 から、進捗状況が説明されています。

(スライド 5) 「(1) フォーラムの試行」に関しては、終了しています。

(スライド 6) 「(2) フォーラム参加者への継続的意識調査による効果測定」に関しても、ほとんど終了しているということです。あとは分析結果をまとめて、いずれ、土田先生からこの場に出していただけたと思います。

(スライド 7) 「(3) フォーラムの再設計」に関しては、インタビュー自体は終了してい

ると。今、私と竹中さんで分析を進めているところです。これもいずれ出せると思いますけど、今日には間に合わなかったということですね。竹中さん、何か一言あれば。

(竹中) なんとなくイメージはできてきたかなという感じです。

(木村^浩) ②、③は、それを受けての検討になります。①の検討がある程度できたところで、フォーラム研究会で議論したいと思っていますので、よろしくお願いします。

(スライド 8) 「(4) 社会調査の実施」。本日のメインの議題は、「①調査項目の再設計」になりますので、今の議題が終わり次第、土田先生にお渡しして、中心的にやっていただくと思っています。それを受けて、1月に社会調査を実施することになります。今日が検討の1回目。次回で確定する。その間に、何回かコアグループでミーティングをするというスケジュールで進めたいと思っています。

ちなみに、次回の全体会合は12月20日になります。ここで確定をして、そのまま輿論科学協会に持ち込むということになると思います。

(スライド 18) なお、POの岩田先生と、研究のアウトカムをどういう形にするのかというディスカッションをしました。内容としては、スライド18になります。前回の会合で出た指摘を受けて、書かせていただいています。

従来のコミュニケーション研究と比べて優位な点は、「いわゆる専門家」がいなくても成立するコミュニケーション・フィールドの試みという点かもしれない。フォーラムの機能を明確化して、それを実践できるための「システム化」を図っていきたい。第2サイクルでは、システム化を図ったものを導入してみて、どうだったかという分析もできればいいなと考えています。

また、岩田先生からは、ここに関係するような学問的なものももう少し幅広にさらってみてはどうか、というお話をいただいています。これから議事録をまとめるのですけれども、そういう話し合いができたということです。

こちらについても、神崎さんと土田先生に出ていただきましたけれども、何か追加することはありますか？

(土田) 個人的な発言と受け止めていただいて構わないのですけれども、このフォーラムは、初めから合意形成を求めていませんでした。では、何のためにやるのかというと、やはり信頼形成だと思うのです。岩田先生から、「いつまでも市民と専門家という図式はいかなものか」という指摘もあったのですけれども、しかし、あえてその2項対立をすれば、その2者の間でいかに信頼を作るかということが目標だと思うのです。その結果として、どういう同意に至るかということは、このフォーラムは実は関知していない。

ですので、信頼をいかに作るかということに焦点を当てた理論、設計にすべきだろうと思います。

(木村_浩) 「機能の明確化」の部分にそういうことを書き込んでいくのかな、と思います。神崎さんはどうですか？

(神崎) 最終的にどこに向かうのかということを見据えた上で、今、ここで何をするか、ということがはっきりすればいいかなと思います。

(木村_浩) はい。ということで、今回の PO 中間フォローでは、学問的にどう着地していくかというディスカッションをしてきましたので、それを今後に活かせればと思います。

外部評価委員会と PO 中間フォローについての報告は以上ですけれども、何かございますか？

—— 土田先生がおっしゃった「信頼形成」というのは、私もその通りだと思うのですが、フォーラム参加者だけの信頼形成なのか、その信頼形成を広げていくのかによって、全然違いますよね。広げていかなければ意味がないと思います。

(土田) それについては、木村先生はよく「横展開」という言葉を使って説明されるけど、結局、ツールの開発だと思うのです。このツールを提示したら、我々でなくても、誰でもできますよと。

—— たくさん集まりを作って、それが全体的に広がっていくというイメージですね？

(土田) そうです。もちろん、誰もそういう試みをしてくれなければ、ここだけの話になるのだけれども、やはり社会的なニーズはそれなりにあると思います。信頼をどうやって作ればいいのかと困っている人たちに、こんなやり方をしたらうまくいきましたよ、というノウハウを伝えることができる。そういう意味で社会に貢献できるのではないかと考えています。

(木村_浩) そういう横展開です。

今、知識をどうやって伝えるかを考えることがリスクコミュニケーションだと勘違いされているところがあって、懸念しているのですけれども、我々が目指しているのは、「皆に教える」みたいなことではありません。

—— 小さな集まりがたくさん連なって、大きな輪になればいいと。

(木村 浩) はい。そして、「いわゆる専門家」がいなくてもできる。

—— いわゆる専門家がいなくても、講師がいなくても、小さな集まりが容易に作れると。

(木村 浩) そうです。そのための仕組みを作ることが、ひとつの着地点かなとおぼろげながら思っているところです。

他はいかがでしょうか？ ということで、その辺も踏まえて、今後分析もしていきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

2. 社会調査に関する検討

(木村 浩) それでは、本題に移りたいと思います。資料は 3-3、3-4 になります。では、ここからは土田先生にバトンタッチしたいと思います。

(土田) はい。もう皆さんよくご存じのこととは思いますが、今年度最初の検討になりますので、おさらいから入りたいと思います。

まずは資料 3-3 をご覧ください。調査設計の確認です。2 つの調査を実施します。首都圏住民の調査と、日本原子力学会の会員の調査です。

首都圏住民のほうは、東京駅から半径 30 キロ以内から、ランダムに、何々町何丁目くらいの地点を 25 地点選びます。選択は調査会社に任せます。選ばれた地点に調査員を派遣して、直近の国勢調査の結果に準拠して、性・年齢別に割り当てていきます。おそらく、調査員が、飛び込みで、「お宅に何歳の人はいませんか？」と訪ねて、集めてくる。1 地点で 20 人集めてくると、最終的に 500 人のサンプルができあがる。サンプル数は、回収時で 500 です。ですから、確実に 500 票のデータが集まるという調査をこれまで実施してきました。今年度もこれでいいか、ということを確認しなければならないのですけれども、まず、全体を説明させてもらいます。

原子力学会員の調査は、学会員名簿から無作為に 1400 名を抽出します。原子力学会に全面的に協力していただく形になります。今、学会員は何名くらい分かかりますか？

—— 約 7000 名ですね。

(土田) ということは、単純に考えて、5 年に 1 回は当たるというサンプリングになります。

回収率は、例年ですと 40%強。昨年度は少し悪くて、39.9%でした。今年度も同じくら

いは見込めるでしょう。そうすると、確実に 500 票以上は取れて、うまくいったら 600 を超えるようなサンプルが取れるという形です。

首都圏住民調査も原子力学会員の調査も同時期に行ないます。2014 年 1 月の予定です。

また、あとで詳しく見ていただきますが、基本的に両調査とも同じ質問票を使うことになります。つまり、市民にも専門家にも同じことを聞くという調査を計画しています。

まずはここまでにに関して、何かありますか？

—— 東京駅から半径 30 キロとありますが、東京駅から距離の近いところはオフィスビルばかりで、住民の方はそんなにいらっしやらないのではないかということ。それから、そういうところにお住みの方は、離れたところにお住みの方とは違う層であるような気がするのですが、その辺りはどうお考えですか？

(土田) それが東京だという定義ですね。実は、これは調査の世界で定番の方法なのです。おそらく、首都圏調査と銘打った調査は、ほとんどこの方法でやられていると思います。我々が独自に考えてもいいのですけれども、とりあえずは定番で行こうかということです。

—— ちなみに、30 キロというと、どのくらいになるのですか？

(土田) 南は横浜、北は千葉県や埼玉県も入ります。

—— 大宮は？

(土田) 大宮も入っていたと思います。

(木村^浩) 昨年度の報告書を見ていただければ、書いてあるはずですよ。

—— 回収地点の町丁が書いてあるので、それでおおよその範囲が分かります。

(土田) おそらく、輿論科学協会がやっているのは、半径 30 キロのラインに少しでも引っかけたら入ったことにするという形ですね。

—— 基本的な設計を変えてしまうと、調査の継続性がなくなってしまうので、原則は変えないということよろしいですね？

(土田) はい。一応皆様にお聞きしてはいるのですけれども、7、8 年かけて同じ調査を

やってきましたので、よほどのことがない限り、条件は変えたくない、という思いがあります。経年変化が追えるということが非常に大きな意味を持つので。条件を変えると比較できなくなってしまうので。

よろしいでしょうか？ では、調査設計はこのまま継続します。

続いて、質問項目ですが、資料 3-4-1 をご覧ください。3-4-1 は、先ほど案内がありましたように、首都圏住民向けの調査票です。

2 ページ目は、Q1 で関心のあることを聞き、Q2 で不安を感じることを聞いています。

昨年度の場合は、3 ページ目に、原子力規制委員会に関する質問を入れてあります(Q3、4)。

4 ページ目は、原子力発電についての考えを聞いています(Q5～9)。

5 ページ目の Q10 も原子力発電について聞いていますが、使用済み燃料に少し焦点を当てた形になっています。

6 ページ目では、福島第一原発の事故のこと、特に放射線のことを聞いています(Q11)。

7 ページ目で、20 年後の発電はどうなっていると思いますか、と聞いています(Q12～15)。

8 ページ目で、改めて、放射線・放射能に関することを聞いています(Q16)。

9 ページ目で、これは昨年度初めて聞いた項目ですが、原子力に携わっている人たちや組織のことをどう思いますか、という質問をしています(Q17)。

10 ページ目で、一般に会社が信頼される理由を聞いています(Q18)。その下に、震災後の省エネについて(Q19)、電気料金について(Q20)の質問があります。

11 ページ目はデモグラフィック項目で、性、年齢、学歴、職業を聞いたという形になっています。

ここまでよろしいでしょうか？

では、資料 3-3 に戻ります。今年も同じように聞きましょうという候補として、少し多めに挙げています。ですので、この会議で、これを減らすという形になるだろうと思います。

まずは一般的関心(Q1)。これは、どうでもいいような質問といえどどうでもいいような質問です。我々の目的にとって、なければなくても構いません。けれども、例年この質問から入っています。社会調査では、導入部分の質問項目も割と大事で、誰でも簡単に答えられる、そして、このまま惰性がついて、最後まで答えていく、というための質問項目になります。

ただ、先ほどからどうでもいいと言っていますけれども、経年的に人々が関心を持っているものがどう変化しているか。その中で原子力は何番目に位置するか、という知見は得られています。

—— 分析的にはかなり重要な成果がここから得られています。

例えば、Q1には「原子力」や「原子力施設の事故」という項目がありますが、多くの中から選ぶ場合と、Q5のように「原子力に関心がありますか」と聞く場合で、全然結果が違うのですね。それが、関心が高まると近づいていくのです。あるいは、中国餃子の影響が出たり。いろいろなところで影響が出ます。

(土田) ということですので、Q1は今年度も入れたいと思っています。

続いて、Q2(一般的不安)も入れたいと思います。何%くらいの人が原子力が不安だと丸をつけるかということは、社会の動向のバロメーターになりますので、大事な項目になります。

Q3は、昨年度の特殊な事情だろうと思います。私としては、規制委員会についてはもう聞かなくていいのではないかと考えています。しかし、ご意見を承ります。

Q5~9は、コアの質問項目です。1から5までで丸をつけるという形でやると、統計的にはいろいろな分析ができますので、毎年この形で聞いています。

Q10も続けていいのではないかと。あとで言いますが、部分的に出し入れがあってもいいと思っています。

Q11は、福島に関して聞くとすれば、もう少し別の考え方があるだろうから、新しい項目を作ったほうがいいたろうと思います。

Q12~15は、実は原子力の世界では定番の質問です。私も、3ヶ所くらいで、この質問をやっている調査を見かけたことがあります。定番ですので、続けていいのではないかと考えています。

Q16は、放射線についてはまだ聞いたほうがいいのかという思いもあって、一応リストに載せています。どうでしょうかというところです。

Q17ですが、やってみてかなり面白かったので、項目の出し入れをしつつ、今年度も聞いてみようかなと。これに絡むような質問をむしろ作りたいなと思っています。さらに言うと、フォーラムのために使う質問は、Q17をたたき台にして発展させる形で作ればいいのかと考えています。

Q18は、なくてもいいかなと思っています。

Q19、20は、もう3年経過して、賞味期限が切れたかなという気がします。

デモグラフィック要因は当然聞くことになります。

まずは、新しく追加するというよりも、削るほうからご議論をいただければと思います。

(木村_浩) Q18はどうでしょうか？

—— Q18は分析がなかなか難しいのですよ。ずっと継続していて、面白い結果が出るのですが、評価しにくいので、他にいい質問があったら省いてもいいかもしれません。

(木村 浩) 私としては、Q3、Q19、Q20 は今年度は要らないかなと。

—— Q3 の 1 年後の比較は面白いかもしれないけど。

(木村 浩) 規制委員会について聞くのなら、インタビューで聞くほうがいいでしょうね。アンケートでは、もうこの段階の話をするべきではない気がします。

(土田) 私が一番気にしているのは、原子力規制委員会のことを聞いて、上のほうにこういう説明文があったとしても、何のことか分からないという市民が大半を占めるのではないか、ということです。もう忘れてる。ニュースにも出てこない。まあ、委員長がたまに映りますけれども。でも、もう質問しても無理ではないかという気がします。

聞くのであれば、委員会ではなくて、「原子力の規制に関してどう考えますか？」という質問項目でしょうね。

—— そうですね。

—— Q3 は、昨年度は原子力の規制の主体がどうなるのか、というところがあったので、これをずばり聞く必要があったのかなと。今年はその必要は薄らいでいるという意見に賛成です。それから、規制の主体についての認識を問うにしても、軽く扱っていいのではないか、というスタンスにも賛成です。

それから、Q19、20 は要らないだろうという点も賛成です。

ただ、Q18 に関しては、フォーラムとの関係を考えるなら、別のアプローチも含めて、工夫をしたほうが良いと思うのですね。「信頼」って何だろう。もしくは、「信頼している」ということがどういう振る舞いに表れるのか、どういう言葉に表れるのかということを一一般論として聞いておくと、フォーラムで「信頼醸成」をする際の思いがけない手助けになるのではないかと思うのです。この聞き方でいいのかどうかも含めて検討してはどうでしょう。例えば、クロスチェックする形でやると面白くなるのかなと。少なくとも、Q18 は、継続性という意味では残したほうが良いかなと思います。

(土田) いいご指摘なのですが、私が引がかかるところは、Q18 は会社が信頼される理由を聞いているのです。何かエスタブリッシュされた、権威のあるものに対しての信頼を聞いている。でも、フォーラムは、「専門家もエスタブリッシュされている存在ではない、同じ人間なのですね」ということを気づかせた上で成り立たせているので、「信頼」を聞くにしても、「会社」ではないだろうと。そこに引がかかっているのです。

—— 組織ではなくて人にフォーカスしているということは分かります。ただ、その中間

で、今おっしゃった「権威」、宮内庁御用達とか、肩書きにも人が信頼を求めてしまう、みたいな深さが出てきそうな気はします。

—— 昨年度は Q18 だけだったのですが、その前までは、会社と公的機関について聞いていて、やはり微妙に違うのですよね。

(土田) 例えば、「会社」を「専門家」に変えてしまうとか。選択肢はガラッと変わると思いますけれども、専門家が信頼される要因はなんでしょうか、とか。

—— Q18 になるかどうかは別として、「信頼」というキーワードで 1 問起こすという方向でいいのではないのでしょうか。

(木村^浩) フォーラムの立場から考えても、私も、信頼項目を充実してくれと後で発言しようと思っていたので、検討していただくと助かります。

フォーラムの参加者が全体の中でどういう位置づけであり、フォーラム前後でどう変わったか、ということを見ていくには、とても重要な項目だと思うので、その辺も踏まえて考えていただくと助かります。

(土田) はい。他にございますか？

—— 包括的なコメントなのですが、震災後の 3 年ということで、絶対に残さないといけな思われているところがおありならば、そこは絶対残して下さい。3 年ずっと見ておられた土田先生をはじめとする視点から。むしろ、それを優先していただいていいのかなと思うくらいです。

(土田) 分かりました。

—— Q2 の「普段の生活を送るうえで」の「送る」は、こういう字を使いますか？

—— 使うと思います。ワードで、「日々を送る」という例があるので。

—— ここは変えていないですよね？

(木村^浩) 変えていないです。考えもしなかったです。

(土田) ええ、考えもしませんでした。毎年そういう議論は最後にやっているのですけ

れども。

—— 「生活を過ごすうえで」のほうが、日本語としてはいいと思うのですけれども。

—— 変えても問題ないですか？

(土田) うーん。

—— 「生活をするうえで」にしたほうがいいと思います。

(土田) 普通は「生活するうえ」で、でしょうね。

—— 文字を変えたくないのであれば、ひらがなにするとか。

(土田) これは文科系のムラの話です。文科系のムラでは、こういうところを変えたから影響しているのではないか、という議論がたまに起きます。

—— 影響がないことを証明しなければいけないのですよ。

(木村^浩) だから、日本語として問題がなければ変えないほうが望ましい。「日々を送る」という用法があるなら、おそらく「生活を送る」も問題ないし、意味が通じるならそのままのほうがいい気がします。

(土田) 他はよろしいでしょうか？

細かいワーディングに関しては、12月20日に最終的に確認します。

では、追加する項目について、ご説明いたします。ここでかなり議論が出てくると思います。

昨年度の調査を取り巻く状況を振り返りたいと思います。去年の12月に衆議院の総選挙がありました。それまでは民主党政権で、基本的には原子力は廃止するという方向で動いていました。

総選挙で自民党が大勝し、安倍政権が組閣されて、原子力は、推進とまでは言わなくても、これからも続くということが世の中の風潮として提示されて、さらにそれに抗議運動が起こることもなく、心の中でどう思っていようと、表面的には日本の社会が受け入れたという形になっています。

前回の調査は、2013年の1月に実施したということで、調査票を設計する段階では民主党政権でした。実施するときには政権が変わっていたというタイミングでした。

そして、今年はどうでしょうか、という話になっていきます。

まず、福島のことを聞かなければならないと思います。震災がどうだったということより、事故がどうだったかということより、むしろ、福島をどう考えるかということが焦点になるのかなと思いました。

例えば、a) 汚染残土について。首都圏では、受け入れることになるだろうと思っている人は皆無でしょう。だから、首都圏調査では扱いにくいのですが。全国調査であれば、自分のところに持ってきてもいいか、みたいな質問を考えられるのですけどね。そこは考えないとならないのですけれども、汚染残土をどうするかということに象徴させて、福島のためにどのくらい尽くそうとしているか、ということ首都圏住民に問うてみたいということです。

b) 高レベル放射性廃棄物処分について。2011年度、2012年度の調査結果を見ると、高レベル放射性廃棄物の処分を急がなければならない、今決めなければならないと思っている首都圏住民が増えていることが見て取れます。昔は数%しかいなかったのに、20%ぐらいまで割合が増えています。だとすると、これを提案してもいい時期だと思われるので、改めて、高レベル放射性廃棄物をどう考えていますかというような質問項目がひとつありうるだろうと。

c) 新エネルギーについて。どの調査でも聞いているので、改めて我々がやらなくてもいいのですけれども、新エネルギーへの考え方が、一時のように、夢のエネルギーみたいな形で、とにかく新エネルギーにすれば全てが解決するという考えが未だに続いているのか、それとも、違った評価が芽生えてきているのかということ測定することができるだろうと思います。

d) 福島第一原発の廃炉事業について。廃炉にするということは決まったけれども、更地になるまでおそらく50年以上かかる。更地になっても、人の住めるかどうかは定かではない。原子力学会がかなり深く関わる調査ですので、ここはまともに聞いていいのではないかと。私としては、市民よりも、原子力学会員のほうに目が向いています。

—— これは興味深いですね。だけど、一般の方がどう見ているかということもやはり興味深いですよ。

(土田) まあ、無理だと思っている、というところから始まると思うのですけれども。

—— そうですね。それをどう考えているか。要するに、エンドステイトをどのようにイメージしているか。

(土田) 最後に、e) 低線量被ばくについて。これも新エネルギーと対になって、至るところで聞かれていますけれども、この調査でも、首都圏の人たち、それから学会員が、低

線量被ばくをどう評価しているのか聞いてみたい。怖がるほうがおかしいという答えが、本当に学会員で主流を占めるのかどうか。

—— 低線量被ばくというのは、どのレベルかによって、かなりイメージが変わると思いますが。

(土田) 100ミリシーベルト以下ではないでしょうか。つまり、証拠のないところ。根拠のない10、20という数字にこだわる人が多いのかな、というのも、調査の対象であろうと思います。

—— 別件で、敦賀で、低線量被ばくの調査をしました。その結果が使えるのであれば、それを交えてもいいのですが、使えないとなると、別のものを作らないといけませんね。

(土田) 要は、安全率をどのくらいにしてほしいか、という質問になると思うのです。非常に高い安全率をかけてほしいと皆さんが思っているのか、かけなくてもいいと思っているのかを聞く質問になるだろうと。

—— 首都圏の人たちに対して調査されるので、首都圏の人たちと原子力学会員が、低線量被ばくをどう捉えているか、という差が出てくるわけですね。実際に深刻に捉えているのは一部の福島の人たちなのです。それはここでは置いておくとするならば、「ああ、首都圏にはこういう認識の人が多いな」ということがクリアになるような設問にしてほしいですね。

(土田) はい。これは木村先生とも相談したいのですが、100でもいいから、福島でサンプルが取れるといいなと個人的には思っています。同じ調査を福島でもやれないだろうか。

—— 私は、福島では無理だと思ったので、敦賀でやったのです。

—— (福島と敦賀は) 違うと思いますよ。

—— ええ。でも、福島では無理だと思ったのです。

—— それはありますね。なかなか難しいと思います。

(土田) まあ、実際問題としては予算が絡みますので…。

—— 福島でやらなくてもいいのですけれども、調査の結果が出てきたときに、それを福島の人が見て、「ああ、首都圏の人たちは、低線量被ばくに対して、私たちとずいぶん認識が違うな」ということが分かるような質問にしてほしいですね。

—— 福島の人と、首都圏の人で、どちらが厳しく見ていると思いますか？

—— 福島の人たちは、20とか、5とか、その辺を巡って議論しているのです。

—— 原子力学会誌の10月号に、半谷さんという福島で活動されている方のインタビュー記事が載っています。「福島で、環境放射線が高いところで暮らしている人たちは、放射線なんか怖くないと思っている。ところが、福島から避難して、避難先で暮らしている人たちは、1ミリシーベルトでなければ嫌だと思っている」と書かれています。

—— そうです。その二極に分かれているのです。

—— 私は、首都圏の人の意識は、どちらかというと、避難している福島の人たちの意識に近いのではないかと考えています。

—— 首都圏の人が、1とか10とか20という数値をそんなに意識しているとは思わないのですが、聞いてみて分かるものですか？

(木村_浩) 福島だと、「ほとんどの人は0.23を知っていますよ」と言っていました。

—— 毎時0.23マイクロシーベルト。すなわち、年間1ミリシーベルトのことですね。

(木村_浩) そういうことです。1ミリではなくて、0.23で認識しているようです。福島は、そういうレベルの話になっています。

—— 福島で暮らしている人は怖くないというのは、認知的不協和と言うのですよ。怖いと思うと住めないという話です。

(木村_浩) でも、それは、半谷さんが付き合っている人はそうだ、という話です。

—— 少し結果がずれていて、「避難している人は放射線が怖い」ではなくて、「放射線が怖いから避難している」わけです。そこが転倒していると思います。

(木村 浩) あとは、避難しなくてもいい行政区に住んでいる人たちは、手当がないから避難できないのです。個人的に避難する人は別ですけども。そこに住まざるを得なかった人は、今、そういう気持ちになっているということです。さらに別の層もあって、別に最初から何とも思っていない人もいます。いくつかの層が折り重なって、福島状況を作っているようです。

半谷さんは、避難はしなかったけれども、線量が高いところに住まざるを得なかった人たちとかなり密接に付き合っている。それで、2年経って、こんなものなのか、という状況が見えつつあるのです。これを私たちが言ったら駄目だと思います。半谷さんは現地で活動されている方だから言えるけれども、私たちがそれを受けて、全てがそうだ、みたいなことを言うのはとても危ないです。

—— その地域でそういう体験をしている人しか言えないことですね。第三者が言うべきことではない。

(木村 浩) 一方で、半谷さんも、専門家側からは「あんたは素人なのに、そんなことまで話してもらっては困る」と言われるし、市民からは「あんたは回しものだろう」と言われるし、大変だ、と言っていました。

注意しなければいけないのは、今の話が全てではないということです。そこからポロポロ落ちていく人たちも結構いるので、社会調査をするなら、そこを見据えてしないと、危ないことになると思います。

—— 今回は首都圏住民を対象に調査をするのだけど、調査票を設計するとき、福島の人たちにも同じ質問ができるように作っておく、ということではないでしょうか。

(土田) 応用心理学会で、こんな発言がありました。福島の人たちは、放射線のことを忘れたがっている。もう考えたくない。そんなことはなかったことにして、普通の生活をしたがっている。逆に言うと、ニュースなどで汚染水の話が出てくると、神経を逆なでされるので、こんな報道は見たくないと言っている。

(木村 浩) それはよく聞く話ですね。

—— 低線量被ばくが怖いか怖くないかという質問は、私はあまり意味がないような気がします。

国は、事故が起きて以来、首尾一貫して、避難先から福島に戻るにしても、そのまま生活を継続するにしても、その基準は20ミリシーベルトですと言いつけています。それ以外の数字を使ったことは一度もありません。

一方、長期的な除染の目標は1ミリシーベルトになっています。ICRPも、長期的な除染の目標は1ミリシーベルトにすべきであると常に言っていますから、これは別におかしな話ではありません。

だから1ミリシーベルトと20ミリシーベルトは全然違うものなのですから、それをどう認識しているか、聞いてみてはどうでしょうか。その2つが違うということすら、認識されていないかもしれない。多くの人は、除染目標が1ミリと言っているから、1ミリ以下にならないと帰れないと思いついでいるのではないか。例えば、「政府は20ミリという数字しか言っていない。あなたはそれをご存知ですか」という設問とか。できないですか。

—— それは「知らない」が多いと思うのですけれども、まず、関心があるかどうかという観点からいくと、そんなに関心がないのですよ。

—— 首都圏の人は知らないでしょうね。

—— 低線量被ばくに関しては、「あなたは今でも福島のものを買って食べていますか。子供に与えていますか」という聞き方のほうが重要ではないでしょうか。

—— Q16のサ)が、かなり近い質問ですね。低線量被ばくではないのですが。

それから、1ミリシーベルトとか、20ミリシーベルトの話になると、数字をどう出すのか、あるいは出さないのか、という辺りが難しいのです。数字を出すとすると、おっしゃるように、まず「ご存知ですか」から入らないといけませんが、「ご存知ですか」の質問は分析が難しいのです。

—— 私は、学会員も1ミリと20ミリの違いを分かっていないとにらんでいます。学会員の9割以上は、政府が20ミリと言っていることすら知らなくて、政府は1ミリと言っていると思いついでいるのではないか。

—— 放射線の境界は、昔は1ミリシーベルトでしたよね。設計などの場合、1ミリの20分の1でやるのですよ。ですから、50マイクロシーベルト。昔はそれで大騒ぎしていた。学会員の中には、未だにそれを信じている人もいますよ。

(木村 浩) 調査票の中にどれを入れるかという議論を先にやらないと、ここだけ詰めても仕方がないと思います。

低線量被ばくに関して言うと、健康に対するリスクの議論と、安全基準の議論を分けて考えないといけなく、それを混同している人が多いのです。100ミリはリスクの話、20ミ

リや 1 ミリは基準の話なのです。そこが一緒になっていて、しかもうまく伝わっていないので、1 ミリ、20 ミリがリスクの議論と勘違いされて住民に届いている。だから、そこは分けないといけない。

—— 今、木村先生が言われているのは、1 ミリや 20 ミリというのは、追加被ばく線量のことを言っているわけです。事故で撒き散らされた放射線によって、追加的に被ばくする線量のことを言っているだけであって、実はその他にも、自然放射線の被ばくもあり、医療被ばくもあって、実際に健康に影響するのは総合的な線量なのだけど、一般の人たちは、追加被ばく線量と総合的な被ばく線量の違いを認識していない。

(土田) 毒を飲むか飲まないかの線が 20 ミリのところにある、というような認識が、普通の人の認識でしょう。それより下だったら完全に安全で、20 ミリを少しでも超えたら死ぬ、くらいに感じている人が大部分ではないでしょうか。

—— 1 ミリシーベルトでそう思っていると思います。

(木村 浩) ええ。1 ミリでそう思っていると思いますよ。

—— 設計者は、追加被ばく線量のことしか頭にない。周辺監視区域の線量が 1 ミリシーベルトです、あるいは、設計はその 5 分の 1 でやっていますというのは、全部追加被ばく線量のことなのです。それは健康管理の基準とはまったく違うのだけれども、その違いを、説明する人もあまり気を配らないで説明してしまう。だから、聞いている側はまったくその違いが分からないのですよね。

(土田) 基本に戻るのですけれども、この調査は、学力試験をやるのかどうか、ということが一方ではあるわけですね。学会員はこんなに物知らずだ、ということをはっきりしてもいいのですが、だからなんだとも言えます。

—— いや、学力テストというよりも、私は、広報とか、知らせる側について聞きたいのですね。政府も、原子力規制委員会が安心・安全のワーキンググループを立ち上げて、中村委員もそういうことはずっと言い続けていると言っているけれども、ではどれだけ知らせる努力をしているのかというと、私は、非常に心許ないなと思っています。現に、こんなに皆知らないではないか。国民が知らないのに、言い続けているとはとても言えないのではないかという気がして。そういうことは調べる価値がないでしょうか。

—— まだはっきりしたところは分かっていないわけで、正解はないですから、違うから

正しく伝わっていないという話ではない気がしますけどね。

—— それで、原子力規制委員会が、年内にまとめるガイドラインにそういうことをきちんと明記すると昨日言ったら、今朝の NHK ニュースで、20 ミリシーベルトを規制委員会が初めて打ち出したかのごとく報道しているわけですよ。その報道ひとつ見ても、今までの政府の広報が不十分だと言えるのではないかという気がしました。

ただ、社会調査は来年の 1 月だから、年内にはそういうガイドラインを大々的に出すと言っているから、それで広報が徹底してくれば、1 月の段階では皆よく分かっているという話になるかもしれないので、意味がないかもしれません。

—— 難しいところですね。結局、追加できる量は 1.5 ページなのです。Q3 がなくなって 1 ページ。それから、Q19 と 20 の半ページ。まあ、Q18 がどのくらいになるか分かりませんが。

(土田) そうなのです。あまり入れられない。もちろん、ページ数を増やすという選択もあるのですけれども。

今までの議論からすると、新規に「信頼」という項目を挙げて、それが Q18 に置き換わるということになるでしょうね。

—— 今、食品の表示の問題が大騒ぎになっているので、信頼のクエスチョンに、それも入れてはどうですか？

(土田) いや、先ほどから申し上げているように、力を持っている人間を信じられるか、という質問ではないようなものにしたいのです。

—— 追加する項目についてですが、「汚染残土」は汚染土壌と汚染除去物のことだと思うのですけれども、まあ各論は置いておいて。a)、d)、e) は時事的なテーマですよ。身近な話題で、社会的に解決すべき問題で、個人的には聞いてみたいですけど、聞かなくてもいいような気がします。この調査において、どれだけ意味があるかということだと思うのです。

個人的には、「デモによる反対活動をしている人をどう思いますか」と聞いてみてはどうか、と思います。「原子カムラ」の推進派の専門家みたいな人たちが主体のひとつですよ。二極対立はよくないということを前提にして、あえて言うならば、その対極にいる人たちは、デモなどで反対をしている人たちなのです。「その人たちのことをどう思いますか」という質問は、これまでなかった、重要な項目ではないかと思うのです。「反対はしているけど、あの人たちにはついていけない」「行きたいけど行くチャンスがない」「そこまでのテ

ンションが上がっていない」「あんなのは勘弁だ」。いろいろな意見があると思います。

それから、信頼をどうこうするということが目的であるならば、先ほど土田先生もおっしゃっていたように、会社の信頼性の問題ではなくて、徹底して個人の信頼性の問題を聞いてみたらどうでしょうか。そのひとつとして、専門家の信頼の要件を出してみるというのはいいと思います。会社については、可能であれば省略してもいいと思います。個人として信頼を得るためには、どういうことが必要か。それを追及していくための質問にしてみてもどうでしょうか。

(土田) 確認ですけれども、デモをしている人たちについて聞くときに、あなたはデモに行きたいですか、というところに焦点をあわせるのか。世の中にはデモをしている人たちがいます。ああいう人たちをどう思いますか、というところに焦点をあわせるのか。どちらでしょうか？

—— 当然前半です。アンケートの趣旨からいうと、前半しかありえませんが。

—— 私からも確認なのですが、デモをする人たちに対する感情を聞きたいのか。デモの政治的有効感みたいところを聞きたいのか。

—— そこまでは詰めていません。

—— つまり、こういう項目があればいい、ということですね。

政治的有効感のほうであれば、いろいろな先行研究があるから、それを参考にできるのですけれども。

—— でも、その質問が有効なのは、原子力にアンチの人だけになりますよね？

—— そういうことですね。だから、原子力に反対の人にだけお聞きします、という設計でもいいかもしれません。賛成の人に聞いても意味がないですから。

(土田) 原子力学会員の 8 割は原子力に賛成なのですが…。とても重要な質問で、いい質問だと思うので、原子力学会員がなるほどと答えられるような形に加工する必要がありますね。

—— だから、原子力学会員の多くの人たちがその設問をスルーできるような構造にすべきだと思います。

(土田) いや、むしろ原子力学会員には、デモをしている人たちをどう見ているかを聞きたいですね。

—— 強引に入れるならば、原子力に賛成の人と反対の人に分けて、それぞれの設問、という形はありますね。

(木村 浩) 関与の度合いを変えた選択肢をいくつか用意しておけば、それでできると思うのですが。分けると、分析も面倒くさいし、間違える人が増えるのです。

(土田) あと、この質問は、分けると意図を感じられてしまうかもしれません。

—— そうですね。方向性を誘導していると疑われてもいけないから、難しいですね。

(木村 浩) しかも、フォーラムをやりますから。

あくまで「デモをしている人を観察的に見て、どうですか」という質問がベースで、その中に、「私も参加したいと思う」とか、「すでに参加している」という選択肢がある。そのくらいが関の山かなと思うのですが。

—— そういうアプローチの仕方もちろんあるのですが、私に関心を持っているのは、専門家が信頼されているか、信頼されていないかと同様に、反対派のプロたちが信頼されているか、信頼されていないか。その一点を聞きたいのです。

(木村 浩) だったら、観察者の立場で聞いたほうがいいと思います。デモをしている人たちがいるけど、あの人たちの言っていることを信用できるかできないか。

—— あの人たちは反対派のプロとは言えないのでは？

—— まあ、プロと言ったらオーバーですけども。

(土田) 昨年度は Q17 で原子力に携わっている人たちのことを聞きましたよね。これと同じようなバージョンで、原子力に反対している人たちについて、という形で聞いてはまずいですか？

—— 私も突然言った提案なので、詳細設計までは詰めていないのですよ。多様な選択肢がありますし、その結果がもたらす結果もいろいろありますから、それについて、今ここで詰めますか？ どうしますか？

(土田) 詰めていただければ、後が楽になるのですが。

(木村^浩) それを採用するのかどうかですよ。他との絡みがあるから。

—— 皆様のご意見を聞いてみたいですね。今のような問いがあったほうがいいのかどうか。

—— 私は、市民の方の答えのほうに興味があります。でも、どう考えても、非常に客観的に見ているような気がするのですね。

(土田) テクニク的な話ですけれども、「原子力に反対している人」という聞き方のほうが、この調査としては望ましいのですけれども、ただ、「一般論として、政治的な意見で活動する人がいますね」という聞き方もあります。そう聞いてしまうと、「原子力に反対している人」と同じにはならないですか？

—— ならないと思います。

—— 今までは、原子力に反対している人は政治的な色合いが強かったですよね。震災を経て、多くの一般の方々もそこに参加するようになってきたと思うのです。国会でデモしている人が全員プロの活動家ではないと思うのですよ。

(土田) うーん。多くの、という形容詞には留保をつけますけれども、ただ、一般市民が参加することに関して、ハードルが低くなったことは確かでしょうね。

—— それと、今まではああいうことをしてもあまり影響がないと思っていたけど、今回は、政治的に多少なりとも影響されたのではないかとはいっています。

—— 政治的有効感が高まったというのはありますね。

(土田) 確かに、こういうことをやることで、社会をよくしていると実感している人はいそうですね。

—— それはたまたま政権がそういうときだったからだと思いますけども。意見も聞いたじゃないですか。的確な行動だったとは思えないけれども。

—— 事故後、割と若い世代の、今まで原子力にそんなに関心を持たなかった人たち、特に小さいお子さんを持っている若いお母さんたちは、神経質になったし、放射能や放射線に関する恐怖感が強まったと思うのです。先ほど低線量被ばくの話が出ていましたけれども、小さいお子さんを育てている方は今でもそういうことを気にしている方が多い。小さい子を連れてデモに参加している人もたくさん画面に出てきますよね。

だから、そういう活動をしている人たちのことをどう思うか、それこそ参加してみたいと思うかという質問に対して、どういう結果が出てくるのか関心があります。

—— 私も、女性の人と話をして、いろいろなことを聞いているのですが、まさにおっしゃる通りなのです。それから、子供がいなくても、孫を持っている方にも同じことが言えます。

その人たちは行動的ではないのだけれども、大事なことは、えもいわれぬ不安を持っているのです。この不安を、原子力の専門家が、まあ私も専門家の端くれかもしれないけれども、どうやったら取り除けるかといつも考えているのですね。

行動まではいかないけれども、不安を持っているという事実は、世の中の多くの人にはたして知られているのだろうか。どうも認識不足ではないかと思うのですよ。

メディアはその辺を鋭く見ている、デモの様子を懲りずに何回も放映したり、取材しているわけです。福島でやっている大きなお祭りのほうが人数は多いし、たくさん集まってくると思うけれども、それはそれ、これはこれで、世の中にそういう人たちがいるということがクリアになるような問いかけ方というのは、私は、名案はないのですけれども、大事なことだと思うのですね。

—— そういう方たちを悪く見ているのではないか。そういう方向に誘導しているのではないかと疑われて、この調査の客観性も中立性も全てが損なわれる可能性があるような気がいたしますが。

(木村 浩) それに関連して聞きたいのは、例えば Q17、原子力に携わっている人たちについて聞くことは、原子力学会がやっているアンケートだから別に構わないと思うのですけれども、例えば、その裏面に、同じような項目、同じような形で、「デモをしている人たちについてお伺いします」と書いてあったら、普通に受け入れると思いますか？ それとも、えって思うと思いますか？ えっ、原子力学会はこんなことを聞くの、と思われてしまうような気がするのですが、どうですか？

—— 私も、そう思われてしまうと思いますね。

—— その設問をした時点で、この調査は（デモをしている人を）別に見ているんだ、と

は見られますね。

(木村 浩) それなので、Q17 形式で聞くのは、興味深いけど、避けたほうがいいのではないかと思います。聞くとしたら、かなりマイルドな形にして、どこかにうまく紛れ込ませたりしないと難しいだろうなと思っているのですけれども。

—— 特定の政治団体の活動に対する意見を聞くのと同じことですから、かなり政治性を帯びてしまいますから、避けたほうがいいと思います。

Q17 の裏返しで、「原子力に反対している人たちや組織に対する印象」という形で、一般化して聞くのであれば、その懸念はだいぶ薄まりますけれども。

(土田) 木村先生がおっしゃっていたように、これだけで大項目を立てるのは危ないと思います。他の項目に紛れ込ませる形で、3、4 問入れるのが現実的かなと思いますが。

—— いえ、1 問でいいです。Q6 の「今後、原子力発電を利用していくべきだと考えますか」で、「5. やめるべきである」に丸をつけた人だけに、「デモをしている人をどう思いますか」。その 1 問だけでいいです。

—— 5 だけだと回答数が少ないので、ほとんど何も出ないと思います。

—— ああ、そうですか。4 を入れても？

(土田) いや、4 を入れると（ある程度の数には）なるのですけれども、ただ、「あなたはデモに参加してもいいと思いますか」というような質問では駄目ですか？

—— それでも構いません。

—— 私は、しつこいけれども、その質問は相当リスクだと思います。「〇〇党の考えをどう思いますか」と聞くのとまったく同じ意味を持ちますから。

—— Q10 の中に、「デモなどについてどう思いますか」という形で 1 問入れるか入れないか、が関の山だと思いますが。

(土田) 「原子力をとめるためには、デモなどに参加すべきである」。納得できるか、納得できないか。

—— そうです。そのくらいかなと。

(土田) 原子力に携わっている人はどう見えますかという質問は、原子力学会がやるから問題がないのですよ。だから、デモをする人はどう見えますかというのは、反対派の人がその調査をやってくればいいのですよ。それなら問題ない。

(木村^浩) それなら問題ないですね。

—— 専門家の対極にいるのは、反対派ではなくて、えもいわれぬ不安を抱えて、どんなに理屈で説明されてもどうしても不安感がぬぐえないという一般市民だと思うのです。いくらいろんな理論で説明されても、心から納得するのとはまた違いますから。だから、そういう一般の人たちと、専門家の認識のギャップを調べるのが重要ではないかと思うのです。

フォーラムの中でも、大事なのはそこだったのではないかと思うのですね。そこをどのように埋めていくか、近づくかということがテーマだったわけですから。

—— それは大賛成です。専門家が気づくということが狙いの設問が、私は一番大事なことだと思います。

—— 一般市民には、どんなに理論武装をしても、説明しても、理屈でぬぐいきれない漠然とした不安感がある、ということを知っていただくことが大事ではないかと思っているのですけど。

(土田) その通りなのです。そういう発想があって、この調査が企画、継続されてきたのだと思うのですね。

—— 私もまったく同感です。お子さんを持つ母親の方、あるいは孫を持つお祖母さんが、なぜ放射線のことを心配するようになったのか。その不安の原因を探れるような設問ができるといいですね。

—— おそらく、しきい値の部分が分からないから不安なのだと思います。

—— それは学問的に分からないのです。調べようと思っても、影響が出ないほどリスクが低いのです。要するに、影響が、証明できないほど低いのです。だから、私は影響がないと言ってもいいと思っているのだけれども、影響がないという証明もできないわけです。

—— 一方、一般の人は、影響が限りなくないに等しいから大丈夫と思うのか。それとも、今お腹にいる赤ちゃんが何十年も経ったときにどうなるかは実証されていないから分からないじゃないかと思うのか。

—— 追加する項目として、汚染水の問題を入れていただけたらと思います。政府と東電に対する、それこそ「信頼」の問題だと思うのです。アンダーコントロールと名言したけれども、されていないという現状があるわけですから。それが来年の1月までにどうにかなっているとは思えないし。その問題に対して、皆さんがどう思っているのか。

—— 今いただいたご意見は、「d) 福島第一原発の廃炉について」の1項目として、入れられると思います。

—— 私は、Q11の中に入れたらいいのかなと思ったのですが。

(土田) Q11も出し入れをしますので、それはありえますね。

(木村^浩) 廃炉の質問も、現実的にはQ11を入れ替えることになると思います。

—— 追加する項目の多くは、Q11にうまく盛り込めるかもしれませんね。

—— ひとつだけ教えてください。今、汚染水の話が出てきましたね。汚染水について、女性で関心をお持ちの方は、個々に聞けばいらっしゃるのですけれども、男の世界みたいに思ってしまう人も多いのです。皆さんは、汚染水について、どうお考えですか？

—— まず、汚染水自体が海に流れていきますよね。そうすると、食にも関わってきますよね。そういう意味で、やはりこれは大きな問題だと思っています。

(木村^浩) すみません、議論の途中なのですけれども、少し休憩を入れたいと思います。

—— 4時にオフィスに帰らないといけないので、一言だけ。高レベル放射性廃棄物の質問を充実していただければと思います。

(土田) はい。では、5分間休憩にします。

(休憩)

(土田) それでは再開します。確か、手を挙げていた方がいましたね。

—— はい。先ほどから信頼の話がされていますが、個人の信頼と同時に、どういうところから発信された情報なら信頼されるのか、ということ聞いてみてはどうでしょうか。先ほど、心が安心しないというご発言がありましたが、それはつまり信頼できないからだと思います。だから、個人に対して信頼はどういうところに得られるかと聞くのと同時に、どういうところからの情報なら信頼できるのか、みたいなものを聞くのは必要ないでしょうか？

(土田) それも重要な質問だと思います。心理学的には、信頼の基底因というのは結構整理されてきています。ただ、具体的にこの問題に関してそれが何なのかということを知るのは、時事問題的には面白いかもしれない。ということになるだろうと思います。

例えば、東京大学の先生が言ったら信頼するのか。それとも、WHO が言ったら信頼するのか。私の知る限り、一番いいところは WHO です。大抵の人は、WHO が大丈夫と言ったら安心します。

—— では、それはもう分かっているのですかね？

(土田) ええ。だいたい分かっています。一番信頼されないのは政治家です。調べてみてもいいかなとは思いますが、分かってはいます。

(木村_浩) 信頼項目をどのくらい充実させるのかという話と絡めて検討したほうがいいと思います。

(土田) それでは、言いつばなしで終わっては生産的ではないので、少しまとめさせてもらいます。

12月20日にもう一度この会合を開きますが、それは確認の回みたいになります。その間にコアグループで話し合うのですが、どの項目を残して、新しい項目は何を入れるかということに関して、確認させてください。

Q1、2は残します。Q3は外します。Q5からQ9までは残します。ここまではよろしいでしょうか？

Q10も残そうと思います。ただし、少し出し入れがあると思います。

Q11は残しますか？ 私は外そうかと言ったのですけれども、福島の問題をやろうとすると、Q11を残して、入れ替えをしたほうがいいかなという気がしてきました。

(木村_浩) そういう意味では、Q10はなるべく入れ替えなしで、Q11で吸収するほうが、

継続性はいいかなと思いますけれども。

(土田) そうですね。

Q12 ですが、休憩中に話題になったのですが、20 年後の発電量というのは、確かに日本では官庁の調査を中心によくやられているということは私も承知していますが、実際問題としては、何を測っているのかよく分からない質問であることは確かです。つまり、希望を聞いているのか、客観的な予測を聞いているのか、それとも、こうあるべきだという理念を聞いているのか。そこがよく分からないので、もし追加する項目がたくさんあるならば、Q12 は削る第一候補にすることを提案したいのですけれども、いかがでしょうか？

—— 私は、Q12 はあまり意味があるとは思えないですね。国の政策ですら、どのエネルギーを何%にしたいという予測を過去何十回とやっているのだけれども、一度として当たったためしがない。世の中の人々の希望を聞いても、その通りになるという見込みもまったくないので。

—— 希望を聞いてその通りにするというよりも、それを聞いて、意識の背景を分析するという意味でやっているのですけれども。希望通りになるかならないかという話ではありません。

—— この質問は、継続質問ですか？

—— 3 年間くらい継続しています。

—— 「まだこんな状態なのか」、あるいは、「だいぶ変わってきたな」ということについては、相当関心があるのですが。

(木村 浩) そういう意味では、今年の 12 月に、エネルギー基本計画が一通りできるはずですよ。この項目は、福島事故以前から聞いていて、福島事故によって大きな変化がありました。ですから、今後のイベントでどう変化していくかは、見ておいたほうがいいと思います。

—— エネルギー基本計画は、今までみたいに、具体的な数値が出る見込みはないようです。

(木村 浩) そうらしいですね。数字は出せないみたいですが、何を使っていこうと努力しますという定性的な議論は出るでしょう。その中で、原子力がどう扱われるのかというこ

とが公式的に国の発言として出てくるので、ニュースになるのではないかと考えています。エネルギーの状況がこれから少しずつ明確化していくので、そういう国のメッセージが世論にどのように反映されるのかというところは、この質問に一番大きく表れるかなと思います。

(土田) 分かりました。では、**Q12** から **15** までは残すと。

—— 分析としては、**Q12** だけを残すか、**Q13**、**14** を残すか、そのいずれかではないかと。

(土田) まあ、**Q14** と **15** は落とせるかもしれませんね。

—— その辺は、コアグループに一任でいいのではないのでしょうか。

(土田) よろしいですか。では、コアグループで引き取らせてください。

(木村_浩) 私としては、せめて **Q12** だけは残したいという気はします。

(土田) コアグループの中に残す派と落とす派が入りましたから、いけると思います。

—— 先ほど、**Q12**～**15** は希望か予想か理念か分からないというお話があったと思うのですけれども、設問の仕方はこのままでいいのでしょうか？

(土田) やはり経年調査をしますので、少しおかしいぐらいなら、昨年度と同じ聞き方をすることになります。残すなら同じにします。

続いて、**Q16** ですけれども、先ほどの議論でいくと、これも大事だということになりましたね。

—— ここに低線量被ばくなどをうまく盛り込めばいいのではないかと。

(土田) では、**Q16** も **Q11** と同じように、入れ替えを多くするという形で残すと。

—— すみません。**Q16** のシ) なのですけれども、追加候補の汚染残土とかなりかぶっているように見えるのですけれども。

(土田) そうですね。ここはだいぶもめた項目でした。最終的にこういう形で残ったと。

—— 結果はどうだったのですか？

(木村 浩) 昨年度の最後にお見せしているはずなのですが、ちょっとこの場ではパッとは出てこないですね。

—— ええと、首都圏住民は、約 30%が受け入れても構わないと言っています。約 20%は嫌だと言っています。残りが「どちらともいえない」。

学会員は、約 70%が構わないと言っていて、5%強が嫌だと言っています。

—— 石原知事が前向きの発言をされていたから、その影響もあったかもしれませんね。

(土田) 続いて、Q17は残そうかなと思います。

Q18は、個人に変えるという条件で残す。

Q19、20は外す。

Q21以降のデモグラフィック項目は当然残します。

外すと言ったのは、Q3とQ19、20だけです。そうすると、Q11とQ16に入れ込む形以外で新規の項目を起こそうとすると、1ページ半ぐらいのスペースしかないということになります。

—— Q19、20は、フォーラム参加者の選定に利用したいから入れてほしいという質問だったと記憶しているのですが、今年度は要らないのですか？

(木村 浩) どうでしょうか？ これは継続質問ですか？

(土田) これは昨年度だけです。

(木村 浩) これは選定にはまったく使いませんでした。だから、要らないかな。

(土田) 要らないと思います。分析しても何も出てきませんでした。

ということで、1ページ半は削れます。

—— Q20の電気料金が上がっても構わないというのも、分析しても何も出てこなかったのですか？

(土田) これは、調査技法的に言うと、やってはいけない質問をしているのです。1つの質問で2つのことを聞いているのです。上げるべきでないのか、いくら上げていいのか、

という2つを聞いていて、回答者の答えが分離できなくて、結局分析ができない。

(木村_浩) 定性的な話は言えるのですが。確か、「4. 3～5割」、「5. 5割以上」に丸をつける人はほとんどいなかったはず。上げるとしても、あまり上げるなという議論がほとんどだったと思いますが、これも結果が出ますか？

—— はい。学会員は、「原子力発電をやめる必要はない」がほとんどです。

首都圏住民は、「1. 電気料金を上げるべきではない」が30%強、「2. 1割以下」も30%強、「3. 1～3割」が20%、他はほとんどないですね。

(木村_浩) という感じになって、電気料金を上げてまで原発やめろという人はいないというところがとりあえず確認できたので、今年度はいいかなと。

(土田) 原発をやめることと電気料金が上がることをリンクして考えている人がいれば、この質問は意味があったのですけれども、現実問題としては、原発をやめると電気料金が上がるということが理解できないという人が市民の大半だったと思うので、この質問は結局機能しなかったということです。

—— ドイツは再生エネルギーにシフトして、電気料金が跳ね上がってしまった。だから、今、固定価格買い取り制度をやめようという方向になっている。だけど、世論調査をしたら、電気料金が上がっても、歯を食いしばってでも再生エネルギーを継続しようという人が、なんと4割を占めた。数日前の新聞に報道されていました。

(土田) そうなのです。ドイツのように、電気料金の痛みを日常のこととして分かっているならば、この質問は意味があるのですけれども。

—— 日本は、まだ、1割上がって大騒ぎする段階ですから。ドイツみたいに2倍に跳ね上がって、それでどうしようかという段階だと、この質問は意味が出てくると思います。

(土田) ということです。

次に、追加する項目ですが、a)の汚染残土については、Q11ですでに聞いていることを考えながら、少し追加という形で済ませましょうか。

(木村_浩) 汚染残土については、どういうことを聞きたいと考えているのですか？

(土田) Q11のシ)のようなことですね。

(木村 浩) シ) は汚染残土ではないですね。

確認ですけれども、今の除染の方針では、中間貯蔵までは福島の外に出さないことになっていますよね。

(土田) でも、将来的にはどこかに出すでしょう。

(木村 浩) 30年後には最終処分場を作ると言っていますが、それもすごく曖昧にされている。他の県も、県の中でやるという話になっているので、県を越えてどうこうという話は、汚染残土に関してはあまりないかなという気がするのですよ。

(土田) では、a) はやめましょう。その代わりに、高レベル放射性廃棄物を少し厚くしましょうか。

(木村 浩) 高レベル放射性廃棄物に関しては、首都圏住民の関心が上がってきているけれども、これはいわゆる福島で出ているようなもの、除染の廃棄物と混同して、この結果が出ているのかもしれない、という懸念がありました。だから、そこを明らかにしていくのは学問的には意味があるかなと思います。

—— 実は先週、崎田さんに学会の委員会でお話ししていただいたのですが、崎田さんの資料の中にこの話が入っていました。福島第一原発 4 号機の使用済み燃料の話が大騒ぎになったことが、早く処分場を作らないと、発電所に使用済み燃料がたまってしまう、という意識を高めた、という紹介がありました。私もそうではないかと思っていたので、そのお話を聞いて、合点がいました。

本当は、まったく関係がないのですがね。発電所に使用済み燃料がたくさんたまっているのは、処分場が決まらないからではなくて、六ヶ所村の再処理工場の運転開始が遅れているからなのですが。

だけど、世の中の方は、崎田さんのレポートによると、処分場の建設を急がなければいけないという意識を持っている。昨年度の調査で処分場を急がなければいけないという意識が高くなったのは、やはりあの 4 号機の騒ぎが影響したのではないかと私も思っていたけれども、崎田さんの報告で合点がいった次第です。

だから、この調査で、それがはっきりとデータで出るといいですね。だけど、首都圏住民の調査でそれが出るかどうか。崎田さんはおそらく福島とかいろいろ広範なところでお聞きになっておられるので。首都圏の調査で聞いて出てくるかどうかは分からないけれども、それを聞いてみることは意味があるかもしれません。

(木村 浩) 崎田さんは、おそらく高レベル放射性廃棄物のワークショップでいろいろお聞きしていると思います。私が記憶しているのは福井でやったときの話なのですが、
「原子炉をとめても、そこに使用済み燃料があれば、リスクじゃないか。だったら、早く処分できるように、廃棄物の処分場を作るべきだ」という声が、住民の方から出てきたのです。そういうこともあって、おっしゃっているのだと思います。

(土田) 誤解も含めて、どのように思っているかという質問。それから、どうしたいかという質問を入れることは考えられますね。

—— 例えば、Q10の中に「処分場を早く決めないと、使用済み燃料が滞ってしまう」という質問を入れると、今みたいな話はクリアに出てくる。そう思うという人が大部分を占めると思いますよ。

—— 細かい話になりますが、高レベル放射性廃棄物というとガラス固化体をイメージしますよね。それは核燃料サイクルありきの話なのですが、直接処分だってありえる。

—— 直接処分の話が出てくると、私が先ほど直接関係ないと言った話が直接関係するようになってくるので、話はややこしいのですけど。

—— 一般の方が、「高レベル放射性廃棄物」から連想できる限界は、プールの中にある使用済み燃料棒かな、と思いますけど。それが分かるだけでも、ちゃんとニュースを見ている人だと思うのです。

—— 「使用済み燃料棒の処分」としたほうがいいのかもかもしれませんね。

(木村 浩) それは正確でないから、学会員からクレームがつくと思います。

実際には、まだ再処理をどうするかも決まっていない。だから直接処分も考えるけど、本当にやるかどうか、まだ何も決まっていない。実は、福島事故の前は、放射性廃棄物についての説明文をつけて、どう思うか、という質問の仕方をしていました。それが、福島事故を受けて、ちょっとこれは聞けないということでペンディングになっている。それ以来、ずっとできていない。これからどうなるかが分からないので、聞けないのです。

(土田) 除染の廃棄物とは別に、という形で、知識提供型の、それこそ説明文を入れるような設問にしてはどうですか？

(木村 浩) その知識が、今は曖昧なので、書けないのです。だからやめたのですよ。直接

処分が入ってきた瞬間に、全然違うことを書かなければならなくなる。エネルギー基本計画がどういう書き方をしてくるかで、全然違う話になってくるのです。

(土田) そうしたら、どう処分するかということにはまったく触れないで、「使用済み核燃料を安全にしなければならない」みたいな言い方で聞いてはどうですか？

—— すみません、今の議論でいうと、Q10のク)は大丈夫なのですか？

(木村^浩) これは技術の議論なので、問題がないと思っています。この政策を採用するかどうかは聞いていないのですね。

—— 今採用していない政策を書くとき論誘導になってしまうけれども、ク)は今採用している政策について聞いているわけだから、おそらく問題ないと思います。

(土田) ただ、ク)は、もんじゅがちゃんと動けば、という前提がありますよね。

—— ク)は、技術論なので、意見ではないので、問題はないのです。

ただ、技術的にはできるけど、実際はできないという問題もありますよね。そうすると意見になるのです。

(土田) おそらく、技術論で考えて、できないと答える原子力学会員中にはいるはずですよ。

—— 市民の側からしたら、それはおかしいと思ったら、できないと答えるかもしれない。

(木村^浩) ク)は少し考えたほうがいいかもしれませんね。もんじゅの動向も、今不透明になっているし。もうやめることを決定したのですか？ まだですよ？

—— とんでもない。もんじゅをやめたら、途端に再処理もやめなければならなくなって、六ヶ所村にたまっている3000トンの使用済み燃料が全て発電所に戻ってくることになります。そうすると、発電所の使用済み燃料のプールがあふれかえってしまう。すなわち、再稼働なんてとてもできなくなってしまいます。

—— でも、予算は大幅に減りましたよね。

—— 高レベル放射性廃棄物か、直接処分かという話があるので、「核のごみ」という表現

を使うと、専門家は怒るかもしれませんが、どちらにも取れるのではないのでしょうか。

(土田) 確かに。マスコミでも使いますね。

—— 「核のごみ」だと、イメージが少し違う気がします。

—— イメージが悪いですか？ 専門家からすると、高レベル放射性廃棄物と直接処分体はまったく違うものなのですが。

—— 再処理をしない場合には、使用済み燃料は、途端に高レベル廃棄物になるのです。

—— なります。いや、でも、再処理をしないと高レベル放射性廃棄物はそもそも出ないのです。

—— 濃縮するから高レベルになるのでしょうか？

—— そうなのです。という感じで、厳密な話をするとややこしくなってしまう。私が懸念するのは、処分というのはガラス固化体だけ、と決めつけているように取られたくないということです。

—— では、「高レベル放射性廃棄物、および、使用済み燃料」にしてはどうですか。

—— 使用済み燃料の場合は、最終処分ではなくて、中間貯蔵といわなければならないのです。ややこしい。

(木村^浩) ワーディングを変えると、まったく使えなくなってしまうので、あまり変えたくないというのが一点。

それから、どの位置に追加するのも考えないといけません。高レベル廃棄物の詳しい話を、Q5～9より前にしてしまうと、影響が出てしまいます。Q3の空いたスペースに何を入れるのか。信頼の話を前に持っていてもいいと思いますが。

(土田) Q18は以前はその位置でしたからね。それが一番現実的では。

—— 確かに。Q5～9の前に、あまりいろいろなものを入れてはいけないのですよね。

(土田) そうなのですよ。だから、3ページに信頼の話を持ってくるのが一番きれいだと

思います。

—— 信頼は半ページくらいですよ。残りの半ページはどうしますか？

(土田) 残りの半ページは、新エネルギーに対する期待を入れますか？

—— 新エネルギーをそこに入れるのであれば、Q12 から 15 を切ってしまうでしょうか。

—— Q16 は、放射能・放射線を、悪者として書いていますよね。環境汚染の原因のもので、そうではない利用法とを並べて聞いてはいけないのでしょうか？

(木村^浩) 放射線利用の話は聞かないほうが良いと思います。そうやって市民を誘導しようとしている、という声はいくらでも聞きますから。我々は放射線をリスクだと思っているので、皆さんがどう認知しているか聞きたいのです、というスタンスのほうが、公正性からすると、いいかなと思います。放射線利用の話をして喜んでいるのは専門家だけですから。

—— もうひとつは、今の事態に対してどういう解決法があるかということは誰も言わないですよ。例えば、先ほどの汚染水は、早く蒸発させればいいのではと思ったりしますけど。

(土田) いや、だって天から降ってきますから。

—— いや、貯めた汚染水ですよ。

—— あれは 62 種類の不純物を除去して、飲料水は 100 ベクレルが基準だけど、その 100 分の 1 以下に希釈して、浄化しているわけです。残るのはトリチウムだけ。トリチウムは除去できないので、濃度が高い。だけど、トリチウムは海の中にも 6 ベクレルぐらい入っていますから、海の水と同じくらいの濃度にして出せば問題ない。だけど、それさえおかしいと言っている人たちもいる。今まで、世界中の原子力発電所や再処理工場でもトリチウムは出ていて、希釈して出していたのです。トリチウムは水と性格が同じなので分離ができませんから、仕方がない。まあ、お金を膨大に使っていいなら分離する方法はないわけでもないのだけど、何兆円というお金がかかってしまうので、非現実的です。

—— 話を戻しまして、どういう項目を入れたいという話ですか？

—— このアンケートは原子力に関するアンケートだと思うのですが、こういう解決法があるということを示すことができれば、そして、それに対するご意見を聞いたら、先が見えていいかなと思ったのです。

—— そういう意味では、トリチウムの希釈放出について、あなたはどのようにお考えですか、という質問はどうですか？

—— いや、一般市民にそんなことを聞いても駄目ですよ。

—— 福島の今の状態を、どこまでどうしたいか、ということを知りたいのですか？

—— そうですね。何か希望があるような話。

—— 例えば、全員帰りたいとか。

—— はい。

(木村^浩) それは第三者が議論することではないのですよ。とても失礼な話です。回り回って福島の人たちに届いたときにどういうインパクトがあるかということを考えて作らないといけないのです。

—— 平和に暮らしている人が言うことではないですよ。

—— 福島の農村で暮らしていた若い人たちが埼玉や東京に出てきて、職を得て、コミュニティに溶け込んでいる。その人たちに、福島に戻って、農業に戻れと言うことは、相当難しい問題を起こしますよ。もう戻りたくないほとんどの人が思っているらしいですね。だから、早く福島に戻りなさい、なんて言われたくないと。

(木村^浩) ええ。当事者が決めるべき話なので、我々が、あたかもこうするべきだと思っている、みたいな質問を入れるのは、怖い。

—— 放射線をきれいにしてあげるから、戻りなさい、なんて言われたくもない。放射線は俺たちに何の関係もない。便利な生活を送れるようになって、むしろありがたい、と思っている人もいる。

—— まあ、職が見つかればそうですね。

—— あるいは、仮設住宅でコミュニティができている場合、自分たちの村に戻るとせっかくできたコミュニティが崩れてしまう。だから、もし恒久的な住宅を建てるのなら、仮設のすぐ脇にそういう町を作ってくれと。今暮らしている人たちと一緒に仲良く暮らせるような生活環境を作ってくれ、という要望もたくさんあるそうです。非常に難しい問題です。

(木村^浩) 最近、帰らない人にどう手当てをするか、ということがひとつの大きなトピックになりつつあります。そういう話もあるので、ここで何か言うのは怖いと思います。

—— ちょっと、どう言ったらいいのか分からないのですが…。Q16 のケ)に「放射能や放射線の状況について、国や専門家に大丈夫だと言ってほしい」とあります。去年は、確かに大丈夫だと言ってほしかったのかもしれませんが。でも、最近、汚染水の事故などがある中で、私の周りの主婦たちが何を言っているかという、「大丈夫なように対応してほしい」と言っているのですね。大丈夫だと言ってほしい、ではなくて、大丈夫な状況にしてほしいと。ちょっと無理な質問でしょうか。

—— 大丈夫な状況にしてほしいと思っているのは全員だと思うのですが。つまり、してほしくないと答える人がいるとは思えない質問を入れても、意味がないと思います。

—— 福島事故に関しては、東電が中心になってやっているということになっていますよね。ちゃんとやってくれるだろうと思って、国民はずっと見ていました。でも、次々と問題が出てくるじゃないですか。

—— 確かにしてほしくないと思っている人はいないと思うけど、逆に言うと、やっていないと思っている人が多い、ということを探り出すには意味があると思います。

—— Q16 のエ)の「国で定めた安全基準が、実際に守られているのかが不安だ」が、比較的ニュアンスが近いと思います。そういう質問である程度あぶり出しをかけていると思うのですよ。それに対して、どういう質問を足したいのかがよく分からないのですが。

(土田) Q16 のケ)は、実を言うと、意味があるのは学会員に対してだと私は認識しているのです。学会員は、端から安全だと思っているのです。それを、国や専門家が言っていない。もっとちゃんと言うべきだ。というようなことを、どれくらい学会員が思っているか。で、同じことを市民にも聞いたという形です。

—— ああ、そういう意味なのですね。

—— いろいろな意味があるので、そのひとつだと思います。

—— 一般市民はそうは取らないと思いますが。口で大丈夫って言われても、と思って見
ていたのですけど。

—— 私もそう見ていました。

—— 2つの意味があると思います。

先ほど、(100 ミリシーベルト以下は) データがないからはっきりしたことが言えないと
いう話をしたけど、それでも言いきってほしいという意味もあると思います。

それから、土田先生が言われたように、明確に宣言してほしいという意味。今朝の NHK
ニュースによると、政府は年内には明確に 20 ミリシーベルトは大丈夫ですと宣言すると言
っていました。そういうことをしてほしい、という意味もあると思います。

(木村_浩) ケ)の反対がキ)です。「国や専門家に大丈夫だと言ってほしい」に対して、「自
ら勉強しなければならぬと感じる」。この2つは、どこに自分のスタンスを置くか、とい
う質問になります。

そういう意味では、例えば、「放射能や放射線について、自分たちで管理したい」という
項目を入れて、その対として、「放射能や放射線の管理は国や専門家が十分にやるべきだ」
という項目を入れる、というのはありかもしれません。

(土田) いずれにしても、ケ)は今年度はなくしていいと思います。

(木村_浩) ケ)は、あてはまると答える人がそれなりにいると思いますけど。

(土田) でも、解釈が難しい。

—— 私は、「大丈夫だと言ってほしい」に対しては、信じられない、と思いますね。そん
なことを言われても信じない。

(木村_浩) 言ってほしいけど、信じないということですか？

—— いえ、言っても信じないということです。

(木村_浩) つまり、言ってほしくない？

—— ええ。空々しいですから。

(木村_浩) 「大丈夫だなんて言ってほしくない」。

(土田) それは面白いかもしれませんが。「放射能や放射線の状況について、国や専門家に大丈夫だとは言ってほしくない」。

—— 被害を受けた人が同じことを言っています。大丈夫なんて言ってほしくないって。

—— まあ、これはあてはまる、あてはまらないという質問ですから、逆転するだけですけど。本当は違うんですけどね。

(土田) ニュアンスは違ってきますね。

(木村_浩) ええ。ニュアンスはずいぶん変わりますね。

この質問群は、放射線の管理については自分たちがやります、人にやってほしいです、というレベルの質問。それに対して、どういう結論を誰が判断してアナウンスするのかという議論があるので、その辺をバラバラにして聞いているのですね。

—— でも、「わからない・知らない」があるから、因子分析ができなくて、あまり細かい分析ができないのですよ。

—— 確かに、こういう質問は、「どちらともいえない」につける人が圧倒的に多いですね。

—— それは構わないのです。だけど、「6. わからない・知らない」と「3. どちらともいえない」を一緒にしていいのか、分けたほうがいいのかという議論があるのです。そこがちゃんとができると、木村先生がおっしゃったような、項目の中で関連性が導けるのですが、このままだと難しいのですよ。

(木村_浩) このままというのは、形式が、ということですか？

—— ええ、形式が。

(土田) まあ議論はあるだろうけれども、6を3に変換して、強引に分析することは可能ですから。

(木村_浩) ええ。分析するときは、6は3に入れるのでしょうかね。

—— すみません、単純な質問なのですがすけれども、質問文の意味がそもそも分からないと思ったら、6につけていいということですか？

(土田) そういうことです。

—— 人によっては、意味が分からなくても「どちらともいえない」につける人もいるかもしれないですけれども、それは個人に任せるといことです。

(土田) さて、ちょっと先に進ませてください。新エネルギーは飛ばして、廃炉に関してですけれども、具体的にどんな質問項目が考えられるのでしょうか？

—— 廃炉については、真っ先に汚染水の問題があると思います。「汚染水で海が汚されて、食卓にのぼる魚に影響が及ぶのではないかと心配である」。イエスかノーか。おそらく、汚染水を心配している人は、根底にそれがあるのではないのでしょうか。オリンピック委員会で質問した記者も、東京オリンピックで訪れたときに食べる魚が汚れるのではないか、という思いが背景にあって、大丈夫ですかと聞いたのだと思います。それが、今、国際的にも一番関心を持たれていて、韓国が日本の魚を全面的に禁止したのは、その表れだと思うのです。

(土田) ただ、Q16のサ)で、福島農産物が心配だという趣旨の質問をしましたよね。それとかぶりますね。

—— それは土壌汚染による影響ですよ。

(土田) ええ。だから、汚染の原因が違っている。あと、もう済んだ話と、まだ続いている話という点が違う。

—— そうですね。似ているけれども、まだ出し続けているという意味で罪深い。

(木村_浩) 汚染水の影響がどういうところに出ると思うか、皆さんのご意見を少し聞かせてもらって、それを反映したほうがいいと思います。どうですか？

—— やはり一番は魚ですね。近海の魚。

でも、魚は回遊しているから、揚がるのがあそこだけで、別にそこにずっといるわけではないですよ。

(土田) でも、福島はたこの産地らしいです。たこはおそらく回遊しないと思います。

(木村_浩) やはり魚ですか？

—— あとは貝ですね。

あと、食物連鎖を考えたら、どんどん蓄積されていきますよね。そのときそのときは少ないかもしれないけれども、それが蓄積されていく。だから、地下水であるならば、どういいう地下水系になっているのか。海に流れていくのか。それとも、丘のほうにのぼっていくのか。

—— 地下水に関しては、素人考えで言うと、どこかと水脈がつながっていて、思いもよらないところの井戸から出てくることもあるのかな、という不安はあると思います。海のほうに行くのは、私はあまり心配していないんです。どうせ薄まるから。でも、地下水のほうは怖いですね。

(土田) 心理学の教科書に使いそうですね。見えないものが怖いと。

—— 私は、映像的に、汚染水のタンクがどんどん増えていって、漏れるたびに作業員の方たちが、無造作に作業をされているように見えるのです。作業服を着ているけれども。

(木村_浩) ちゃんと管理されているかどうかですね。

—— アメリカでは、一般市民の人から、「汚染水のタンクで水漏れしてしまうような人たちに、原子力発電所の運転管理をする資格があるのか。その日本が世界で一番技術が高いといわれているのなら、アメリカの原子力発電所が心配だ」と言われてしまった。だから、何とかしてほしいと日本の人が相当厳しく怒られたそうです。

—— Q1 みたいな形にして、項目を挙げて、何を不安に思っているか選んでもらいましょうか。

(土田) 時事的な問題として、「廃炉のことでお聞きします」という形にして、「廃炉に

関してあなたが懸念していることは何ですか」みたいな聞き方はありますね。

—— 廃炉と汚染水は分けたほうが良いと思います。

(土田) いや、廃炉の話題の中に、汚染水も選択肢のひとつとして出てくるかもしれない。

—— 廃炉と言ったときは、汚染水のことだけではなくて、廃炉の技術はあるのかとか、どのくらいに確立できるのかとか、そういうことになりますよね。

—— 溶けた燃料を取り出せますかとか。

—— 極端に言うとも「福島第一原発についてどう思いますか」と聞いてもいいのですよ。限定しなくてもいいかもしれないし、限定してもいいし。

(土田) 私は、今お話があったように、そこで働く人間がそれだけの能力を持っているかということを知りたいですね。例えば、福島で廃炉で頑張っている人たちは、エリート集団で、技術的にも熟練工だと市民が思っているかどうか。

—— 思っていないですよ。だからうまくいかないのですよ。

—— いや、皆がそう思っているかどうかを知りたいということです。

(土田) 皆がそう思っていないという結果が出てきたら、市民にはこういう懸念がありますよという形で提案ができるということです。

—— 私は、それでどうしたらいいか、ということを知りたいですね。能力が十分でないと思うのは結構なのですが、ではどうしたらいいですかと。

(木村^浩) それはアンケートでは無理だと思います。アンケートはあくまでも現状の分析であって、そこから先、どういう対策があるかは聞けない。そこを聞くとしたら、インタビューベースで聞いていかないと。それはアンケートの限界ですね。

(土田) そうですね。自由記述など、それに類したテクニックがないわけではないのですが、通常、アンケートは選択肢から選ばせますから。つまり、答えをこちらが提示するわけです。ですから、新しいアイデアを出すことには不向きです。

—— 作業員の数が足りるのか。

(土田) それは聞くことができますね。

—— 作業員の数、作業員の質という項目を立てて、不安なところに丸をつけてもらえば、出てくると思います。

(土田) では、篠田さん、この項目はお任せしていいですか。

(篠田) 分かりました。でも、項目と言われても、どういう項目を挙げるかは、

(土田) もちろんたたき台でいいです。

—— 代表的なものに絞ったほうがいいと思います。

(土田) では、廃炉に関してはそんなところでいいでしょうか。

低線量被ばくについてはもういろいろご意見いただきましたので、最後に、新エネルギーについて議論したいと思います。

—— 新エネルギーに関しては、**Q12** から **15** を省かなければなし。省くなら、1 問くらい入れましょうか。

(土田) そうですね。**Q13** があれば、まあいいかという判断はあり得ると思います。

—— ええ。**Q13** だけ残すという手もあるかもしれませんね。

(木村^浩) 私は、残すとしたら **Q12** を推します。福島事故前後で大きく変わった項目だし、ギャップが一番大きく出ているところなので。

(土田) でも、**Q12** は聞き方が少し雑なのですよ。2 番目、3 番目は聞かないし。どのくらいダントツなのかも分からない。**Q13** と組み合わせると、新エネルギーに関しては分かると。

(木村^浩) そうなのです。でも、**Q12**、**13** を入れるなら、**Q14** もあったほうがいいですよ。で、**Q15** も必要ですよってことになるような気がする。

(土田) Q15 は微妙ですね。つまり、一般市民も、原子力学会員も、電力消費がどのくらい変化するかということに関しては、実は何も分かっていない。だから、聞いても無駄な気がします。

—— Q15 は、電力が増える、経済成長、原子力、という発想で作ったのですよ。

(土田) そうなのだけど、この聞き方で意味があるのかなと。

—— 昨年度の結果でおおよその傾向は分かりましたよ。だから、再度聞いてもあまり意味があるとは思えないですね。

(土田) だから、Q15 は確実に落とせると思います。

—— 多少継続性に問題が出ますけれども、Q12 をベースに、順位か、パーセントが入るように、少し工夫をした質問を考えてみましょうか。

—— 新エネルギーについては、Q13 以上に何か聞きたいことがあるのですか？

—— 基本的には、新エネルギーにどれくらい期待しているか、新エネルギーをどのように見ているかを聞くだけです。

—— だから、Q13 以外に聞くとすれば、新エネルギーの中の何に一番期待をかけているか、ということでしょうか。

(木村^浩) 今ふと思ったのですが、なぜ Q13 の新エネルギーを先に聞いているのでしょうか。Q14 の原子力を先に聞くのが原子力学会っぽいですけど。

Q12、Q14、Q13 の順で聞いて、Q15 を期待感みたいな質問に置き換えて、1 ページにまとめればいいのではないのでしょうか。最初に、どのエネルギー源ですか (Q12)。次に、原子力学会が聞いているのだから、原子力発電はどのくらいだと思いますか (Q14)。次に、新エネルギーはどのくらいですか (Q13)。最後に、新エネルギーの期待感はどこにあるのですか (Q15 の位置に新設)。これで 1 ページに収める。それでどうでしょう。

—— 順序を変えて、Q15 を新設すると。そうしましょうか。

(土田) そうしましょうかね。

—— 鳩山首相は国会で大々的に 90 年比 25%削減という目標を打ち出し、国際公約したのだけど、昨日か一昨日に経産省が出した数字は、90 年比プラス 3.8%になりますと。ということで、マイナス 25%からガクンと後退したことについて、どう思いますか、という質問はどうでしょう。

(木村_浩) ちょっと難しいですね。

—— 廃炉の不安に関しては、低線量被ばく関連のことが多かったですよ？

(土田) いや、低線量被ばくは先ほど議論しましたけれども、論点としては、物理的に危ないということに関する知識問題と、安全係数をどう捉えるかということではないでしょうか。

—— では、低線量被ばくに関しては、安全基準とリスク感問題について少し絞って付け加えるということですね？

(土田) はい。で、昨年度の質問で使えるものはなるべく使うと。

(木村_浩) そろそろ時間が迫ってきました。でも、かなり方針は固まっています。

高レベル放射性廃棄物の質問を新設をする。それが 1 ページぐらい。それから、信頼の質問が充実してくると、半ページというよりは、1 ページぐらいになるから、そうするとこれで新設は埋まる。

それから、今の福島の議論、低線量の議論などは、Q11 と 16 で吸収する。

—— 高レベル放射性廃棄物で 1 ページぐらいですか？

(土田) 信頼と高レベルで合わせて 1 ページぐらいでしょうか。

—— 高レベル放射性廃棄物の質問を Q5 の前に持ってくるのはまずいでしょう。

(木村_浩) まずいです。だから信頼を Q3 の部分に持ってくる。それで、信頼が 1 ページ。高レベル放射性廃棄物の質問は、後半で、できるだけ。高レベル放射性廃棄物だけではなくて、除染の廃棄物の話も明確に書いてもいいかもしれません。そんな方針でいいのではないのでしょうか。

—— 今更ですが、追加する項目の中に、再稼働の是非はいらないでしょうか？

(木村 浩) Q11の中に、いい項目ができたなら入れるという方向でいいと思います。

—— 高レベル放射性廃棄物の質問の中に、小泉さんが言っている、「高レベル放射性廃棄物の処分場ができなければ、原子力はやめるべきである」と入れてはどうでしょう。

(木村 浩) それはいい質問だと思います。

—— それは分析が難しいのですよ。「処分場ができれば原子力をやってもいい」ということなのか。それとも、そもそも反対の理由のひとつとして言っているのか。それによって、意味が全然変わってくるのです。

—— 私には小泉さんの理屈がまったく分からないので、言っている通りに質問してみたいなど。

—— 「小泉元首相が言っている」と書けばいいのではないですか。

(木村 浩) 一般的な書き方にしておいたほうがいいのですよ。そうすれば、2、3年後に再利用するときそのまま使えるので。時事問題にしてしまうと、使えなくなってしまうのです。

—— あの理屈は別に小泉さんだけではなくて、多くの人がああいうことを思っているし、言っている。去年の私の授業の学生さんの中にも、そういう人がたくさんいました。

(土田) それでは、社会調査に関する検討は、このくらいで終わりにしたいと思います。では、木村先生、お返しします。

3. その他

(木村 浩) はい。最後に、その他の項目ですけれども、次回の日程の確認をして、終わりにしたいと思います。

次回は、12月20日の9時から12時になります。場所は今日と同じです。次回は、社会調査票の確定がひとつの目標になります。あとは、フォーラム参加者の募集方法もここまでに確定しなければいけません。近く、フォーラム研究会も開催したいと思っていますの

で、関係する方はよろしく願いいたします。

また、第5回は翌3月を予定しています。

ということで、今回はここまでとしたいと思います。どうもありがとうございました。

以上